特42
986

205197-000-8

特42-986

白石噺孝女の仇討（実録文庫）下巻

春陽堂

M17
EDV-0224

正雪淺草ゐ孝女ゐ逢ふ事

爰ゐ江戸牛込榎町に由井民部之助正雪と云へる兵法家あり〻る其心術の邪正如何ゐ知るべからざれども上ゐ天文下ゐ地利胸に孫吳の兵法を暗んじ廣く天下の豪傑ょ交ゐり其名當時ゐ轟きてこれが敬愛と受る者大名旗本倍臣の人々凡三千余人ょして門前平生ゐ市の如く輩殺せざる者なく最繁昌ょ見えょける此正雪或夜の夢ょ淺草觀世音ゐ參詣ゐ去夫より奥山を徘徊ゐし兎ある茶屋ょさち休らひ茶を喫ながら彼方此方見渡し心の中ょ思ふよう天晴此奥山ゐ櫻樹の無ぞ憾みゐれ數百樣移うへゐゞ一層の詠めならんと夢心に思しゞ不思儀ゐる談看る間に彼方此方ょ多くの櫻樹生出て花咲滿ちたる景色最艶麗ゐ玄く見えにけるゞ多くの中に枯木二樣あり〻る此樹ょも花の咲さらんにゐ詠め榮あるものを置ゐ觀音の妙智力ょも及ばぬ事のと獨り言をり枯木ゐ俄然ょつぼをを生頓て綻び初めけるが瞬息間ゐ眞盛りとぉりたるも夢ゐれゞ怪しとも思ゐぞ其美景きを稱えて居たるょ何處より來たりけん容貌美くしき二個の處女ありて其花の下に彳立〻り正雪ゐ此處女に對ひ御身達ゐ今迄此所に見

給いざりしゞ何處より來ふれしやと問れて處女は會釋をあし枯さる木にも花ぞ咲く觀世音の御誓ひ爭で洩るゝことのゆ可き我情二人は同胞にて御身の力を借り參らせ花咲く春よ逢んとて陸の奥よりはるゝ〳〵と來し甲斐ぞある旅衣頼む大悲の御惠みは空言とあ思されぞと涙含つゝ語るを聽夫い又何等の事ありて我等の力を頼まるゝぞと問かへされて彼處女が再度口を開のんと爲しゝる折節撞出す鐘の聲耳を貫き愕然として驚き覺れい是あん南柯の夢ありける正雪い奇異の思ひをあし夢の始終を考ふるゝ花の匂ひは猶消やらで宛も春の心地あるゝぞ不審さ極り無く其翌日門弟の松田彌五七吉見勝兵衛の兩人を召連て淺草寺よ詣でしゞ觀世音を禮拜あして奥山ゝ至つゝ彼方此方を徘徊爲よ頃しも十月中旬にて小春の空の長閑なる花こそ無けれ夢に見し景狀に髣髴たれど正雪は心の中よて彼邊なりし枯木の有りしいと心を留て見て在る折しも本堂の方よりして十二三歳ある處女を誘引ひ浪人体の武士一人此方を向て來れるを何心あく見る正雪い娘と顔を合せあゞ昨夜の夢よ逢さりし妹娘女よ間違無ければ余りの事の不思議さに側ゐ進みて辞を被け卒爾あがら娘女御に尋ね申さん麼も御身は奥州出生の人よして姉御と共に此土地ゐ來ふれあよはあらずやと問されて娘女のみあふゞ彼武士も最甚ふ驚きたる容子ありしゞ頼て正雪ゞ前に來り禮をあして答ふるよう問るゝ如く姉妹ゐて奥州を出て此地へ來さりしなりと聽く正雪は打点首若し然もあふば姉妹ゞ身に望みの有る可きあふんと的を射れて驚く両人夫を如何にあて知らるゝぞと問かへせゞ正雪い我い當地よ住居する由井民部之助と云ふ者なるゞ昨夜觀世音の靈夢とかうぶり疾くより來りて待く居さりと聽て驚く彼浪人い然てい豫て雷名を聞て慕いしく思ひ居あ由井先生よて在せあろ然るゐても當山の觀世音菩薩靈顯の灼然あるい有難くも恐怖き迄尊とけれ麼も此處女姉妹い身よ大望を抱くを以此地に來りて力とも爲可き人ゐ意中を語げ其方を頼みて本望を遂んと思ひ立ちしあれど明白よ語げ難き望みの事でゆへゞ誰を頼まん目途も無く佛の力を借らんものと七日前より毎日〳〵觀世音ゐ參詣あし憑可き人を夢よありとも告させ給へと一心に願ひし甲斐い滿願の今日ゐ當りて圖ふぞも御身に面會あそのみゝ御身も靈夢を見たまひしと聞けば猶更行末の最頼母しく思いれて雀躍歡喜啻あふぞ此上君の御惠みよて此娘と敎へ導引て素願を果させ給いる可しと折入て頼みゝれゞ娘女も共よ涙あがら掌を合せて頼むよぞ正雪い委細ゐ聽て云々るよう已に靈夢を被ぶりし我なる者を

爭でかゝ疎略ゑ事を計らふ可き望みと云ふゝ大方ゝ推察致してゝへども猶委しく聽可けれど何ゝ兎ゑあれ我家ゑて寛々譚合ゆさんと打連立て牛込なる我家へてそゝ誘引けれ話説兩頭爰ゝ又吉原町てふ花の廓入湊ふさる遠近の客ゝ老少貴賤を論ず諸國の武士東の商人寺の若衆ゑ至る迄皆夫々の一夜妻千代と契れど後朝ゑ別れを送る曉方ゑり來るを迎ふる夕暮ゑゝ笑ひを献ず情を賣り色をあきゑふ傾城の多きが中に宮城野とて當時廓に比ひあき全盛の遊女ゑて其頃得難き物の譬へに臨胸臍の腹でもて唐土の猫宮城野の情々と迄に云てやさるまで逢ひ難き遊女ゝ是なん奥州白石在逆戸村の農夫與太郎が娘女おきのゞ今の名ゑりゝ其頃此廓中に客と遊女の媒妁と業と爲る仲立女ありけるゝ先頃迄葉室屋の抱へ萩の戸君の客とゑり居給ひし方樣ゝ北國方の大名ゑ事へ給ふ歷々ゑて廓の變名を楓と呼びて多くの金銀を撒散らし榮耀榮華を爲し給ふ方樣ゑるゞ先頃ゑり御身の噂を聞恍惚く何卒行末世話もゑし世話ゑも成ふんと一圖ゑ思し萩の戸君ゑゝ唐綾の夜具一具に唐木の枕一双を贈られて已に手切れをゑし給ひ是より後ゝ御身樣を相方に被成れんとて我儕に取持爲ゑとの命せ我儕ゝこれを辞ひゆて他の方ゑて侍らんゑゝ心易く承

引可々れ宮城野の君ゑ侍るもの此廓中ゝ子安貝にて一夜ゝ情けを買んとて百夜千夜と通ひ詰めあこゞれ給ふ方樣の幾人と云ふ數しれゞ何れも本意を遂げ玉ゝず斯在君ゑて在すなれゞ吾儕が仲立爲れゞとて思食とゝゑふ事ゑあらねば他れ色ゑゝ君方と思ひ變させ玉ふ可しと種々に慰ひれども彼人ゝ聽納とべらず斯迄思ひ入ものを一夜の情々ゝ難しとゑらゞ一つ席ろに盃を取替ゑゑゞ勉てもの我本望と思ふなれゞ執持してよと呉々も頼まれ侍れば夫でもとゝ斷り難て免ゑ角ゑ御身に語り聽へんと答へ爲されば甚う歡喜び今日ゝ〳〵と日毎々促さるゝうるさゝに堪兼て然てこそ今日ゝ御身樣の御胸中を聽かんと來しゑりと思咄敢えゞ物語るを宮城野ゝ打聽て萩の戸殿とて吾儕とて同ゑ廓中ゑ勤の身家こそ異れ其中ゑも取別吾儕と睦ゆゑゑき萩の戸殿の馴染の客を吾儕の横取爲さゑゞ人の聞へも穩當ゑらゞ萩の戸殿のおもてくも最耻のしと思ひ侍るゞ假令如何に仰すとも此義ゞかりゝ承引難し御身ゑしゑゑ謝絶言ふて給ゝをかしと云ふ言の理りゑれを仲立も再度説んようもゑく躊りて如此物語るゞ楓と云へる彼客ゝ手ゑ持る物を落せし如く最本意ゑく思ふゑつゝ潤理々に人を代へ計較を變へて宮城野に言入けれゞ宮城野ゝ更に聽ふ氣色なく見る事さへも容易ゑらねゞ

今更昔日悔しと思ひ再度前の萩の戸を買んと爲るよこれさへあ薄情あるを打腹立て再度契るを好まねば謝絶いふて取合ハも然らば他の遊女をといへば何れの遊女も宮城野萩の戸兩個の前を憚このり其上ならも薄情者と思ふゆへ我相方あらんとて承引者もあらざりければ楓の君ハ中流よ楫を絶れ玄舟の如く寄る方無くて漂ひゐる

第八回　宮城野窩ゐ警闘七を見る事

扨も其頃宮城野の全盛ある噂の高きハ江戸ハ勿論諸國迄も聞へて此程京都より遙々の途を宮城野見んが爲とて下り來る客人あり是は未だ一度も宮城野を見されども疾くも先よ千歳屋の主人に身受の事を相談なしぬ主人も一度と喜悦しが猶尋思あして云けるよう彼と心操の優さよ似氣なく我心よ染まざる客よハ假令黄金を山よ積とも見顧りもせぬ氣質あれを未だ一度も見玉ハぬ方樣り根引あし玉ハんと云ハ、承引まじ兎に角今夜ハ然る大名の忍びて此家へ來在あれば其席へ出る前に逢玉ふが宜しからん廣間ハ折よく空て居れば彼所に酒宴を催ほし玉ひ宮城野ご出來らば隨分心を用ひ玉ひ彼が心あ叶ふよう種々と說和らげて其後身受の一談を爲し玉ひあば千に一つ整あふ事もハ可しと聞て彼客人と萬事主人に任す程ゐ宜玄く計らひ給と可しと云ふよ主人と心得て彼客人を廣間に誘引此所に多くの藝者幇間を招ひ集めて酒宴を催うし唄ひつ舞つ賑ハひける扨又楓と云ふ客は此事を漏聞て妬まゑき事極りあく直ちゐ千歳屋へ入來り主人に頼みて彼客人に語ハせけるよう我儕と北國の者あるが是迄久しく廓に入りて遊興を事とあ玄豫て此家の宮城野に心を寄せて度々に逢瀬の事を談合玄が少々故障ことありて其後斷よ思ひ絶へ今ハ毫も執心あ々れど聞々ば御身が身受し給ひ京都へ召具し給ふよ玄就てハ再度見る事の無しと思へば見まゑ欲しく推付がましき事あれど何卒今宵の御酒宴よ一座と許し給ハふば藝者共を召連て聊ゐの興を添へやさんと委細きゝて彼客は未だ御目ゐハ懸らねど余岐無き事に聞候へば辞するも情無に似て武骨がまゑう思ふなれ殊ゐ興を添へ給ハゞ一層酒の花やぎやさん疾く來給へと快よき回答よ楓ハ大よ歡喜名ゐ貧ふ藝者を數多引連を其座席へ入々るが斯在席ゐハ禮義ハ無益と献す盃を請つ戻しつ最打と々て見えにける扨もおきさのゝ宮城野ハ良人よ忠義を立させんと身を此席に沈めしより何時ク敵の所在を知り亡父の恨みを晴す可きと他人に知られぬ憂き思ひ良人と妹の信音を松の位と意ゐ無に粧ひ飾も最物憂く對ふ鏡も打陰る涙の眼もと知らさじと心

苦しく世を送る心の中ぞ哀をあり此日宿れ主人より如此のよし聞けれバ仕度を整へ廣間の口まで來りて窺と垣間見るゐ酒宴ハ今ゞ盛りにゑて幇間藝者のさんざめく中ゑ二個の客人と一個は身の丈六尺余り色白くして眼光清く威風勇壯四邊を拂ひ天晴一個の壯士あり又一人は色黑く目尻下り鼻ひゑげ髭多くして猛惡あり此人をよく見るゐ這ハ是年來尋ね索むる父の讎敵團七あれば宮城野ハ咄嗟と驚き這は我迷ひに在んゃと猶よく見るゑ間違ひもあきす其人あれバ胸まづ塞がり息喘ぎ身體戰栗飛蒐らんと思ひしゞ心を鎮めて勘考あはし其儘部屋へ走り歸りて衣引被ぎて臥しあがら兎やせん角やと工風を凝しぬ斯在る事とも露知らぬ廣間の客や藝者幇間ハ宮城野の最遲しと待てゼ〳〵來ふねバ楓ハ腹ゐ置難ねて主人を呼て聲を慣らせ宮城野ハ如何にせしぞ我輩二個を欺ぶきて大名の客に出しあらん然無くバ早々引連れ來よと敦圉荒く語ふ折しも禿一人走來りて宮城野君の仰せに侍る今此所迄來給ひしゞ俄然に眼暈を胸痛を引戻して部屋に入り打臥して治療し侍れゼ頓ゐ愈可くも思いねバ本意あらぬ事あれど今宵ハ御席へ出難ね侍り最無禮ゐハ侍れども又の日御見ハいんと申付られ侍りぬと禿の語を聞も終らず楓ハ忽ち色を作し這ハ無禮千萬あり實女の身ゐして我儘氣隨京都邊ゟら態に來玉ふ客人の手前も有る可きゐ病氣に假托々來ふぬハ飽迄輕蔑爲すと思いるよし〳〵我直ちゑ至り手を引ぎりて連來らんと立上るを彼客ハ楓の袂を引とゞめ遊女の意氣地も廓中の慣習否むを强て連來るとも却て興を破る可し病氣とあらバ明日ありとも又明後日ゑも來る可けれバ彼女ゞ事ハ打捨置此儘ゑて飲明さんと語れて楓ハ不興氣に其所へ座りて又飲む容子に主人ハ漸く安堵あせしが宮城野の病氣と聞其座を退き飛ゞ如く宮城野の部屋に往き容子を見るゑ衾引被ぎ臥せるを見て甚く驚き醫師ゑ藥と周章るゐぞ宮城野ハ推止め然あ御心を惱まし玉ひぞ吾儕是迄時々の持病ゐ侍れば捨置ても明日迄ゑハ怠り侍らん必ず案事玉いるまじと主人を戻し其余の人にも皆休みねと退ぞけて熟々思ひ廻らすゐ楓と呼し客人ゞ團七なふんとハ知らざりしが先頃よりして我に逢いんと樣々ゐ語送せしが我身の出所を知りたるゆへ然で逢いんと思ふなるか我ゐそ彼れを忘れざれ幼年時ゑ見し我と今の我身ハ最甚う變りて在るを如何ゑして見覺ぼへ在る可き樣ハあしそハ兎もあれ角もあれ年來尋ぬる團七ゐ環り會しハ盲龜の浮木已れやれ欺き寄り一太刀恨みを報いんかいや〳〵彼ハ頗る手錬我ゞ手一つゐ擊得可き者にあらねバ仕損じて返り討ゐも遭ふ時ハ妹の悲

嘆い如何ならん先づ暫く胸を撫り妹あふび我良夫に斯と告げて諸共に名告のけて討取ふんこの何い兎ふあれ園七が住居い何處ぞ聞ま欲し右やせん左やと臥つ起つ業事煩らひ居たりけるが夜いはの〳〵と明る頃禿一人入來り京都の客より御身樣へ竊と届けて玉れとて此書狀交付玉ひしとて差出すと不審あゞら手ゐ取上々て見る所宮城野さま參る去のぶよりと書記せり宮城野心ゐ思ふよう去のぶとい人の名か忍びて通いを謎々の父の敵に環り會ふて心も心あらぬ折心なき戯ぶれかあと封推披らきて讀下すに別れ參らせいてより後い風の便りも無きまゝに如何入らせられいんと御案事ア上まいふせい憂き川竹と聞いへゞ嘸々のらく心苦しく御勤め遊ゞしい事と御察しア上明暮哀しく憑りなく思ひ參らせいわさくし事も先頃根津甚内樣よつれられ當地へ參りいて淺草觀音へ日參いさし觀音の御示現により由井正雪樣の方へ參り厚き御惠みを請け參らせ朝夕たえぎ劍術を習ひ參らせい姉上樣御事も此節い吉原にて宮城野と仰られ全盛の御身のよし正雪樣御門人の中に御前樣の事をよく〳〵知玉ふ御方御座いて正雪樣の被仰ひにい姉妹離れ居いては萬一の節不

都合もろとて此度多くの金銀を御出し被下姉上様の御身を購ひ我身と一所に遊ばしけ
よしにて丸橋忠彌様と御相談あされ忠彌様事京都の者と偽り玉ひて廓へ御出被成しま
〻萬の事彼方様に御計らひに委せ玉ひ一刻も速く御出被下御機嫌能き御顔を拜し海山
積る御物譚致さく正雪様は牛込榎町の御住居よしまゝ呉々も早々忠彌様と御同伴に
御出被成可く何も頓て御目もじの節とあらく筆止め参らせしめで度しし

御姉上様　のふ事　去のぶ

とありしのば是はと計り驚きしが若し我々の身の上を知れる人の戯ぶれかと疑ひまどふ
計りあり

第九回　丸橋忠彌宮城野を身受の事

斯く宮城野い必疑がひ猶幾回か巻返し繰返しよく〳〵見るに間違よう無き妹の筆ありけれ
ば夢かと計り歡喜つゝ今此廣大江戸中にて壹人と呼る玉ふ由井正雪様をよりしは姉にい
遜り優りさる妹が功なり敵の所在も大方と知をたれば遠からぬ本望を遂げぬ可しと思ろい

嬉しさ極りあく禿に座席の容子を聞くに楓と甚く醉しと覺しく倒れて前後も知らぬ体よて
京都の客と左程醉いぞ未だ酒盛して居るよしなれば宮城野い慌忙しく傍の硯箱を引寄せて
さら〳〵と認むる其文に曰く

情け深きは方様とと今の御書にて拜し参らせ去とぐ心嬉去く飛立計りよ思ひしへ共
人目の關に隔てられ思ひの程を通し難ねしへば憚りあゞふ部屋の内迄御忍びのよう願
ひあげ参らせしい其節必の丈けを申上参らせしいはらく〳〵しし

宮城野　寶ある榎様

と認め終りて禿に云含め必ず楓と云ふ客あ覺られぬ様彼の客に竊と交付てたまれと云へ
ば禿と受取て必得侍りと懷中な去舊れ座席に入來りて京都の客を竊に呼出去彼書面を交付
ければ讀終りて懷中あし頓て禿に案内させて宮城野が部屋よ入來るを待設々たる宮城野い
部屋の口に出迎ひ其儘奥へ請ぜ入れ何と語可き言葉も無く先立ものは涙あり忠彌も宮城野
か心を察し右に左と慰さめて是より両人顔を寄せ秘やこに囁やきゝるさてまた志賀國七
の楓と呼びて此廓中よ斯て在るを如何あと問ふあ嚮に本國を追放せらを浪々の身とあり去

より所々方々呻吟ける間去年野州宇都宮の城主蒲生飛彈守殿ゐい拾二萬石を領せられしが俄ゐ四拾萬石と爲ゞ奥州會津へ移らるゝゐよより武勇の名有る浪人を召抱へらるゝよしを聞團七い能き傳をもちて佐竹浪人と偽りて名を岩見大七と改め首尾よく蒲生家に住込しが元來劍道ゑ達しけゞば彼の家に重く用ひられ師範家の列ゐ加いりて最と富有ゐ暮せしが先頃主人の命により此地に逗留して在しが風と吉原ゑ遊び初め夫より平生ゑ入浸りて晝夜婬酒ゐ耽り樂華を極めて居たりしが早此程に至りてい貯蓄も大方竭其上ゐらゞ主人の用事も仕果てゞれば此頃に本國へ歸る可き心積りを爲して居しゞ今日も廓へ來りしに宮城野ゞ受出さるゝ容子如此傳へ聞て豫ての本意を遂げんものと藝者ゐよく〳〵云含め京都の客を欺て宮城野を賺し靡々んと心に計較千歳屋へ來りて一座にゐりたりしに生憎に宮城野が病氣ありとて出來ねば心算りの敗れしより腹立まぎれの焦酒ゐ甚く醉て正体ゐく其儘其所に打臥せしゞ辰刻とも覺しき頃漸くに眠り覺めて四邊を見るに彼の客初め幇間藝者い何處へ往しの影さへ無れば掌を鳴して人を呼ぶに應と答へて出來る禿に對ひて一座せし昨夜の客は如何爲しと問ゐゞ禿れ答ふるよう彼の方樣は先刻ごゝさ宮城野君の御部屋へ往のれ彼所ゑ語りて居給ひしゞ今頃は如何ゐして在すやは知り侍らゞと云ふを聽て團七い未だ近付も無き宮城野が部屋へ往しい心得ぞと思へゞしきりに姉ましく我をも其所へ案内せよと禿と先に立せつゝ蹌踉ゐがら後につき廊下傳ひに行く折しも足下に落散し書がら有れゞ何氣ゐく取上げて讀み下すに宮城野より情郎れ許へ送りし書と思いれさり爰に於て思ひ見るゐ榎と有るい京都れ客にて渠奴の間夫にて在らんずらんと心中恰かゞ燃るゞ如く嫉ましき事極りなく如何で其儘ゐ置可きか思ひ知らせて呉んぞと思へゞ禿ゐ囁くよう宮城野の部屋へ往のゞ此所と告げて其方い戻りね我も闘外ゑ容子を聽き邪广ゐもゐらんと思ひゐば直ぐ引返して戻る可きと言聞けて置々るゞ頓て此所ぞと禿の報知に立止りて禿を遣り竊ゐ容子を伺ゞふ所秘やのゑ語るゐれゞ話は何とも聽取れず暫時ありて彼客は立出る氣色ゐて談話聲の高くゐきゞ見咎めらきては惡しのふんと其所を立出て忙いしく身支度を整へて京都の客ゑ宜しくと云置て此所を立出己が宿せし仲の町の鎌倉屋に立戻りて猶人を以宮城野ゞ容子をこそは搜ふせけゞ扨又丸橋忠彌ゑい宮城野ゞ物語に楓と云へるい志賀團七と聞けゞ大ひゑ驚ろきて若し明日ゐも歸國の程も計り知きねゞ兎ゐ角ゐ彼が住所を問質さんと彼是と人ゐ聞

くゝよ越前といふもあり奥州と云ふあり確と知るもの非ざるべ鎌倉屋へ人を廻して聞合すると是も亦何所と云ふこと明らかあらぎ因て忠彌い勘考なし家來の中に心利たる喜平ふ如此云含め彼鎌倉屋へ宿止しめ團七ゞ容子を伺がいせ其身は千歳屋ゟ懸合て宮城野が身請を談し身の代金其他の拂ひを悉皆く爲濟ゞれべ宮城野に其由語りて立出る準備をあさ去めゞるこれを聞て朋輩の遊女我も〳〵餞別せんと思ひ〳〵の送り物を持來りて暇乞ひ最羨ましと稱えゞる扨其夜忠彌い宮城野を乘物に打乘せて出るを見返る千歳屋夫婦朋輩女郎搖動〳〵と大門口迄從がひ來り此所ゟて互ふ挨拶も別をと云へべ流石ふ共に袂を去ばりつゝ名殘を惜むも道理ありさらべと此所を立出で牛込さして急ぎしが己に小石川御門を通り抜ゞ御堀端を通る折しも屋敷町れ片側より拔身を引提し大の男乘物目懸て飛來るふ早くも見認し丸橋い毫も騷ゞす腰ふせし鉄扇を拔より疾く彼の大男の利腕を發止と打し手練の手のうち何堪らふや彼の男い拔身をうらりと取落せしゞ叶いじとや思ひゞん刀を捨ふ暇もなく後をも見ぎして遁失ゞり忠彌いこれを追んとも爲ぎ他ゟ徒黨ゞ有んかと四方へ心を配て居しが再度來る者も無けれべ心靜うふ拔身を拾ひ夫を手拭以推纏み家來ふ持せていざ行んと乘物を急

がせて榎木町へと赴きゝり

第十回　鶉の目貫雛の所在を告る事

却説由井正雪は去ころ浅草観世音の靈現よりて連戻ち娘女お信の身の上を甚内より聞取て不覺よ感涙を催ゑて其志ざゑを賞讃おし實よ當時の世の中い歴々の武士さへ武道を忘を文道を捨親を討れ兄弟を殺されても知らぢ顔お過行人の多ゝるに年齢も幼少き女子の身お て父ゞ恨みを晴さんと心懸るぞ感心ある斯在孝心あれバこそ觀世音も憐み給ひ我に托して姉妹が本意を達させ玉ふあれ我も力の及バん限りい身よ引請て世話爲可し必ず氣配ふ事お ゝを且又姉は遠のらぢ吉原より請戻ゑて其方と共お養おんとよく語聞けてお信を止め甚内を歸らしめ夫よりお信の名を信夫と改さめ自己ゞ妾の部屋よ連行き妾よ語聽けけるよう此娘女い身の上お大望の件ありて武術を心懸る者よて我には太切の預り物おり然い れ女子の事なれバ御身に預け置程お朝夕お心を用ひ女の道何くを角くれ敎ゑて隨分勤とり給へど聞て妾の答ふるよう御心易く思食せ我子と思ひ何事も隔おく扱かひ侍らんと聞く正雪は大よ歡喜是より長刀を敎にけるゞ元來敵を討んとて一心籠し修業なをバ上達殊に速のおるよ

正雪いほと〳〵感心おゑ心を用ひて敎ゑゝるゞ姉宮城野の身の上は門人よ捜らせし後丸橋忠彌を談合ふて彼ゞ身請を頼みゝるに日ならぢ忠彌は宮城野を請出ゑて連來をバ正雪い大いに歡喜頓て姉妹對面させをバ両個い手お手を取合ふて嬉ゑ涙に暮よける是より宮城野を も妾よ預ゝ是にい手裏釼鎖鎌を敎ゑける扨又姉妹打揃ふて容貌美いしけれバ正雪はこをを案事折々両個に敎訓爲るよう凡男女の中途にして大事を誤まるい色情おれバ御身両個も願望の成就爲る迄い身を慎むぞ肝要おれと呉々も誡め置き妾の部屋の入口へ男子たる者立入可のゞずと筆太お書記せし札紙を粘りお ける門弟等は正雪の意中を知らねバ不審しみ竊よ評し敢ゑりとぞ斯く爲して正雪と両個の女子に怠たらぢ日々敎え導びきゝをバ其熟達の速やゝおるは五年八年修行せゑ者より遙のお優りて見ゆをバ今は試合を爲て見んと門弟誰彼五七人を招ゑ寄せて姉妹と立合せけるが流石の壯年も撃込れ及ぶ者とて無りける拉よ於て正雪も大ひよ安堵ゑ思ひをなし最早敵きよ出會とても心安しと夫よりい頻りに慶賀則七が行衛をこそい尋ねげる爰よ其頃正雪が門弟よ宇野九郎右衛門と云る者あり三千余人の弟子中よて隨一の美男おりしが好色の癖ありて屢々身を過りけれども改むるの心おく平生お婦

人を欺ぶくを此上なき樂みと思ひしが今此両個の娘女を見て不覺に情を動かして人無き折を覗ゞひて語寄らんと思ひ居しが家風正しき家なれゞ人傳あらで言よらん術あければ思ひなごら手を空ゝく爲て日を送り玄ゞ一日此九郎右衛門ハ平生の如く朝早くより稽古場に入來るに此日正雪ハ家ゝ在らで門弟も未だ誰も來ぎして豫て思ひを焦したる信夫一個此所に在て獨稽古を爲して居しが九郎右衛門ゞ來るを見て長刀を仕舞置て出來り挨拶あせゞ九郎右衛門ハ屈竟の時なりと信夫ゞ手練を稱嘆あし頓て莞爾と打笑ながゝ我自得せし長刀の妙術一手在すあり御身ゝ習ハん情あゝゞ傳授あし參らせんと信夫が手を取引寄るを信夫ハ心中大ひゝ怒り懲して道ゝんと思ひしが正雪が思ハくも如何あらんと思ひ直し戯ふきを爲給ひゝと拂ふ手先を又取りて昔時男ハ物かハと謂るゝ我身に挑まれてハ否ゝハあらじと寄懸るゝ信夫ハ猶々憤ふり堪ゑ難て九郎右衛門ゞ掌首打と取るゝと見ゝしが肩に被ぎて七八間筋斗うつて投付たり折しも此頃降續く雨余りの庭面ゝ投付られし九郎右衛門ハ顔も支體も泥塗れに我ゝゞら最浅猿く耻うしくや思ひけん表門の方へ遁出しゞ此時戻る正雪ハ門弟四五人引連て入來るゝ礮と出會九郎右衛門ハ心慌忙尋ねふれてハ面倒ありと言葉も懸々ぎ

目禮あゝ走行容子不審と正雪ハてを呼留め其形狀ハ何事あるやと問ハをてハッと赤面あゝ口隱りなゞゝ答ふるゝ今彼信夫と仕合爲せゝが誤ちて庭へ轉び此爲体ゝハありと最面目あげゝ語すゝ忙ハしく走去りゞる正雪ハ見送りゝ微笑あがゝ語ゞるハ彼好色人が大方彼の信夫ゝ戀慕あせしより彼に戀さを爲るあゝんと夫より家ゝ入ゞるゞ引續きて其後より丸橋忠彌ゞの訪けをゝ居間へ請ゝく彼此と物語りしゝ居たりしゞ此頃石町邊ゝ住居爲ハ目貫師ゝ田村又右衛門と云ふ者あり毎ゝ正雪忠彌とも懇意ゝ出入あしゞるゞ今日牛込邊ゝ用事ありゝ其歸りとて尋ねゞれハ早速ゝ居間へ通し談話なゝて居さりゝが又右衛門ふと見をハ己れゞ座る傍の刀掛ゝ鞘無き白刃を布切ゝ包み其儘掛て有りしハ不審く思ひつゝ是の刀の鞘と如何ゝあし給ひゝと問なゞゝ手ゝ取上げ目貫を視て頭を傾ぶけ此目貫ハ先々月蒲生家の御家來の好ゝ由りて丹誠あし彫刻上たる目貫あるゞ如何ゝして此御家ゝと聞より忠彌は膝を進ませ其刀ゝは子細あり汗も其方に誂らへし蒲生の家來は何と云ふ姓名ありやと問けれハ彼の家中ゝて新參のゝしにて我等の知る人にハとを苗字ハ岩見と聞しゝを名ハ承まはりゞさずと云ふゝ正雪小聲にて此刃ハ子細ありて我方ゝ預るあれど其持主へ戻さん

と思ふて居し所あれば其方大儀なぞの其人の姓名を問糺ぬて我等よ報ぜ呉ふれよ必ず厚く報う可きと云ふゐ委細畏まりぬと直ちに此所より蒲生家の屋敷へとぞ急ぎける茲ゐ於て正雪い姉妹兩個を招きつゝ事の次第を物語り日ゐふを讎敵團七が所在い何所と知る可しと聽て兩個い大に歡喜び涙を流して其厚き情けを謝して居たるし が宮城野の譚るよう吾儕が國よ在りし昔年一羽の鶏が羽を損じ飛雖て居たりしを大勢の子供が寄集りて翫弄ひて居たりしが通り懸りし壯年が二人三人集りて燒鳥にして食べんと子供よ錢と取ふせつゝ鶏を持て行を見て亡父興太郎が種々賴みて酒を送りて引換へ玉ひ家よ飼て置玉ひしが痛をし羽の整のひしもへ野に持往て放ち遣し事の有しを覺え侍るに此度刀の目貫よ鐫し鶏よ是讎敵の在所り知るゝも一つの不思議に侍と云つゝ又も亡父と思ひ出して涙含孝女の心ぞあはれあれ

第十一回　宮城野信夫金井半兵衛ゐ再會の事

扨又金井半兵衛い根津甚内よ別れてより諸國を廻りて七月上旬再度甚内を訪らひて姉妹の安否を問けるゐ甚内い奥へ請ぜ去年お信を引連て江戸へ出て如此ありと由井正雪よ面會なせしより宮城野り事まで委曲ゐ說聽りせりをば半兵衛い大ひに歡喜ひ然らばと此所を別れ出て江戸を投て赴きゝるが此時又宮城野い豫て今年の七月よい良人が尋ね來る可き約束あれば今日り明日かと待暮ぞて居たりもが今日い七月十五日中元の嘉節なをば忠彌方へ祝詞として姉妹にて往可しと正雪が差圖よより下女下男を供ゐ連れ御茶の水の忠彌ゞ家へ打連れて出行しが水戸家の蛮敷前通りよ懸る折しも前面より旅裝ひせし一個の武士冠りし笠を右手にて揚げ頻よ見るを何氣なく見合たりしに豈計らん金井半兵衛ありゝれば是いと計り走寄て這い我良人り兄樣り恙も在で嬉しやと語ふ口よりい最早も先立ものい涙ゐり頓て堀端の茶屋よ入り奥まりたる座席に往き言葉短かに兄弟ゞ身の過來しを物語れば半兵衛い是を聞或い哀れを或い歡び頓て兩人に語るよう我御身達に別れてより諸國を廻りしに奥州會津へ到りし頃蒲生家の家中ゐて岩見大七と云る者い劔術の達人ゐて近頃抱えに成しよし噂を聞て思ふよう團七と大七と名前の似たりと心付き彼が屋敷へ尋ね往試合の事を望をしよ他流と思ふて彼が門弟衆くの中より選拔きて八九人と試合ゐせしが手に立者の非されば彼大七ごの立合ふ可きに病氣ゐりとて試合を辭ひ唯我術を稱美なし酒食を出し饗應しゞ其夜い彼所に止宿ゐし彼大七を熟視るよ身の丈い六尺ゐ近く面開きて色黑く鼻ひしげて髭多く

惡鬼の如き相貌ありと語るを聽て姉妹ハ言葉を揃えて其者こそ尋ぬる讐敵團七なれと雀躍して歡喜けるが兎よあれ問ふ可く語る可き事の多きい中々ゐ濱ハ眞砂も數あふねど斯在途中に語合ひて他人に洩あゞ惡こりあん吾儕二個ハ丸橋様へ參る事にてひへゞ共ゐ往て數々の御禮を陳て給ハれと語ふに半兵衛打点首夫よからんと三人ハ此所を立出御茶の水の忠彌が家を訪問ける此所にて金井半兵衛ハ忠彌と互に名告合ひ初對面の口誼畢り姉妹ゞ世話に成し謝禮の數々陳けれゞ忠彌も大ひゐ歡喜びて種々物語りなしけるが兎ゐあれ是より正雪許往て萬事譚合んと忠彌も頼ゐ支度をおし四人打連此家を出て正雪方へと急ぎけり無程彼所へ至り着々ゞ宮城野信夫ハ正雪に斯う〳〵と語りけれゞ正雪ハ出迎へて奥へ誘引初對面の挨拶畢れゞ半兵衛ハ此所よも又姉妹ゞ厚き情けを蒙むりし禮を右ゐ左述終りて會津に於て團七の大七に出會せし事おんゞを物語れゞ正雪も亦目貫師より聞し事より其後また彼目貫師が問合せしよ全く岩見大七と云ふ者と分明なりし事を告げて是より三人談合なし正雪ゞ門弟の中忠利たる人を選み奥州會津に差遣ハし渠が容子を探らせける扨程も無く門人ハ歸り來りて告るより彼岩見大七ハ佐竹浪人と言立て濱生の家ゐ住込しが全くハ同國よく白石の者なるよ玄確に聞込ひありと聽てハ毫も疑ゞひ無く志賀團七に相違おゑと決してけゞハ猶豫せず速のに計るゞ好けれと門弟の中ゐ蒲生家の武士數人あれゞ此人々よも添書頼みつゝ正雪よりの訴狀ハ門人の高江孫三郎と云ふ者に筆を執らせぬ其訴狀の文に曰く

乍恐以口上書奉願ひ

陸奥國刈田郡逆戸村百姓與太郎娘きさのゝぶト申姉妹の者去々年より私方下女ゐ召抱へ置ひ處奉公律義よ相勤ひゐ付此節緣談之儀に及ヒひ處彼姉妹之父與太郎事其御家中岩見大七殿米ゞ伊達中納言政宗卿御家臣片倉小十郎殿御家來ニ而志賀團七ト被申ひ頃御手討ニ相成右ニ付御同人ニ茂白石表御暇ニ相成當時御當家ニ勤仕被成ひ由右ニ付両人之下女緣談之望無御座志賀團七當時岩見大七殿之御手ニ懸り父供々相果申度旨申居ひニ付樣々教訓致緣談之儀納得ひ樣申聞ひ得共何分承服不致甚恐入ひ儀ニひ得共御威光を以て姉妹之者共御呼出被下一應御利解被下度此段偏ヘニ奉願ひ以上

江戸牛込榎町由井正雪病氣ニ付名代

坪内左司馬

斯の如く認むる外ゝ又一通は姉妹の娘女が願書と爲す其文ゝ曰く

恐れ乍ら願ひ奉まつりゝ口上「文字の書振は前ゝ同文なれども讀煩ふゝしなれば書下しとなす」

私くし共奥州刈田郡逆戸村百姓與太郎々娘女きののぶと申姉妹の者ゝてゝ

陸奥會津御役所

松田彌五七
熊谷六郎兵衛

去々年より江戸牛込榎町田井正雪方に奉公致し居ゝ處先年父與太郎事其御家中岩見大七樣いまゞ奥州白石片倉小十郎樣御家中にて御座ゝ頃父與太郎を御手討ゝ遊ばされ私くし共幼少の事も名只今まで奉公致し居りゝ得共此度暇ゝ相成縁談ゝ儀ゝ及ばれゝ得共私くし共父を亡ゝひ此世ゝ望みもこを無くゝ得バ何卒御慈悲を以て御家中岩見大七樣の御手に懸り相果申度と存じ詰居ゝ間此段御聞濟ゝし被下大七樣御手ゝ懸らを下されゝよう被仰付られゝはゝ有難く存じ奉つりゝ上

陸奥會津御役所

江戸牛込榎町由井正雪下女　きのぶの

其外猶一通の訴狀ハ金井半兵衛の姓名ゐ爲す其文ゑ曰く

恐れ乍ら願ひ奉つりハ口上〔上ゑ同じ〕

私くし義河内國富田村の出生にて御座ハ所幼少の時父半左衛門事奥州逆戸村百姓與太郎と相議り彼ゞ娘女さの事私くし婦妻ゐ相定め置ハ處右與太郎去々年五月奥州白石の城主片倉小十郎殿家來志賀團七殿の御手討ゐ相成り娘女両人ハ江戸牛込榎町由井正雪方ゐ奉公相勤め罷り在此度右娘め正雪方暇ゑ相成ハゐ付豫ての契約通り夫婦ゑ相成ヲ可く筈の所志賀團七殿事當時御家ゐ勤仕被致岩見大七ヲさをハ由承まハり何分大七殿御手ゐ懸り相果ヲ度旨ヲ聞ハゐつさ種々ヲ諭しハ得共一圓聞入ヲさゞ是ゑ由て妻さの並妹女のぶ一世の別をゑハ〻寂期の体も見届け申度何卒願意御聞届け下されハハ御慈悲の段有難く存じ奉まつりハ以上

陸奥會津御役所　金井半兵衛

斯の如く三通の願書と認め猶正雪ハ我手續を以く御老中の添書をも乞ひ請事十分に整ひけれハ姉妹の娘女並金井半兵衛に如此爲よと說含めて我が名代として坪内左司馬松田彌五七熊谷三郎兵衛の三人を差添奥州會津へ發爲んと其準備を爲しゝるゞ準備全たく整ひければ今日ハ目出度首途の儀式見事に取整ふ松の島臺熨斗昆布置鳥置鯉舟盛の祝儀の土器を行ちし終りて正雪より宮城野へハ鎖鎌一振信夫ゑハ白柄の小長刀一筋を與へ外ゐ餞別として白無垢一襲づゝ其他旅中の準備萬端遺る方なく宛行ければ正雪ゞ妾よりも其壙に望て蓬氣ゐるハ女子の身の耻うしゝれ其日ハ是を用ゐよとて衣裳ゑ炷籠む香一包みに紅白粉を送りける扨夫より此所を發出るに姉妹二個ハ永々の恩を謝しつゝ暇乞ひも流石女子の心弱く涙に袖をやひさすふん是より男女六人連れ笠傾ぶけて立出けり

第十二回　白石河原ゐ孝女讐を復する事

扨も宮城野信夫姉妹ハ金井半兵衛坪内左司馬松田彌五七熊谷三郎兵衛の四個の武士と共ゑ

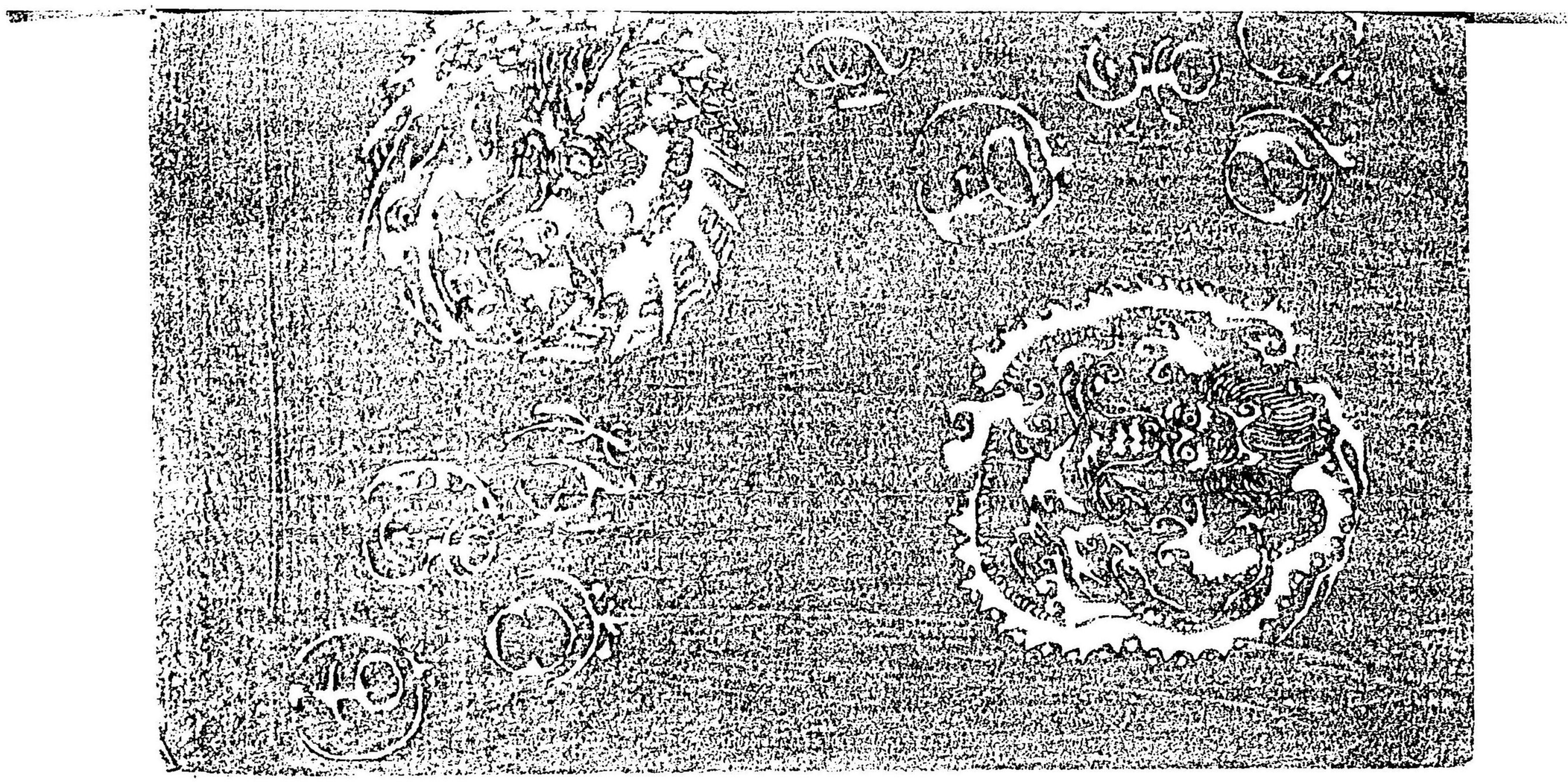
江戸を發出て途中を急ぎて日あらぞ奥州會津わ着し彼三通の訴狀を以て郡方の役所へ差出しゝるわ郡方の役人小妻惣右衛門訴狀を披見し容易あらぬ事と思ひけれゞ追て沙汰すべしと旅宿へ引取らせ此旨早速家老中へ届けたるゞ家老中よりこれを太守へ申上ゝるわ蒲生下野守殿にゝ未ゞ若年わ在せしかど發明の方あれゞ聽給ひて仰するよう道ゝ復讐を願うあるべし兎わわれ岩見大七ゝ佐竹涙人と聞さりしゞ然てゝ片倉の家來ありしゞ最疑がゝしき事ありゝし是より直ちわ仙臺へ使者を遣し大七ゞ身の上を聞し後就て取計ふ旨もあらんと命ずよりて家臣伊丹兵庫早馬わて伊達家に至り如此と物語りて團七が事を問合せしわ早速此由白石なる片倉へ達せふれしに片倉よりゝ名代を以て伊達家へ願ひ立らるゝゝ先年志賀團七事ゝ逆戸村百姓を手打に爲しよし届出しが能糺すわ其事柄頗ふる猥に渉るを以當時追放ゝ付武家奉公を擇ひしあるが姓名出生を偽りて蒲生家へ勤仕せし由聞捨難きのみあらぞ彼百姓ゞ娘女共賤しゝ女子で在あから讐を討んと思ひ立し孝心ゝ實ゝ感ず可く彼是共に我治下の者共にゝへゞ何卒大守の御取計以て蒲生家へ御懸合團七并両個の娘女を我等へ渡し呉らるゝよふ相願度ゝあり若し然もあくゞ城下ゝ於て復讐致させ度と願のよしを聽給ふ伊達の太守も小十郎の望みゝ極めて尤もありと頼て蒲生の使者ゝゝ團七ゝ得片倉の家來ゝて去々年百姓與太郎を手打ゝあせ玄事より追放なせし云云を答へに及びて戻し置引續き荻野刑部競但馬を會津表へ差遣し片倉よりの願のよしを懸合にゞ及ゞれける扨又伊丹兵庫ゝ會津に歸り如此と復命せしゞ下野守殿ゝこれを聽れ兎ゝあれ渠奴が身の上を糺明すべしと仰するゝゞ大七を呼出し訴狀を以て糺問せふをしに大七の答ふるよう最初佐竹の涙人と偽りしゝ罪多けを手打ゝあせしゝ武士の常と思へゞ恥可ゞあらぞ何時あるもあれ立會ふて刀の錆と爲して呉ん此義ゝ御免詑を蒙ふる可しと傍若無人ゝ語放つを斯と太守へ聽え上れゞ下野守殿ゝ氣色を損じ武士ゝ似氣あさ偽り以て當家を欺むく痴者あれゞ兎ゝ角閉籠置可とて閉門とこそありゝけれ其翌日伊達家の使者荻野刑部競但馬ゝ會津の城ゝ入來り主人の分付如此と口上を以て語ふ樣ゝ御家臣岩見大七事原當家臣片倉の家來志賀團七と云し頃百姓を殺害あし追放せふれしゝ名を偽ゝり御家ゝ住込在し所此度百姓與太郎ゞ娘女の者共御家へ願ひし事の由ゝ此程の御使者に由て承知せり右團七ゝ伊達家の陪臣娘女両人ゝ領地の民にて共ゝ縁故の者共もゝ何卒是に關係ふ事件ゝ總て政宗へ御引讓り彼下度此段御許容彼下か

し猶公儀へも政宗より願ひ置し儀よりへべ日あらぎ御當家へ何等の沙汰の有る可きあれど内意を以て此由頼を奉るありと陳るゐて在りけれべ先両使を旅宿へ戻し打寄りて評議ありしが兎ゐ角江戸の沙汰を待んと評定の決しける時疾くも江戸御老中より伊達家へ渡せと通報あれべ然いとて両使へ斯と通じ團七を護送の爲め川田主膳大音河内よ百五十人れ警固を附け宮城野信夫其他の者を讓りの爲とて皆川左衛門八十人の警固を從ゲへ會津を發て領分境ゐ至れべ此所よい伊達家より貳百人の警固在りて受取渡し法の如く相濟けれべ夫よりも仙臺ゐ引連れ行き再度片倉小十郎の城下へとて急ぎ々り扨も荻野刑部競但馬の両人い白石よ到着ゐし小十郎ゐ面會ゐし如此と傳達すきべ片倉家にて受取し上團七い直樣よ螢火典膳へ預けられ宮城野始め五人の者い長屋の中に留め置敵討を爲させんと其準備をぞゐしゐける頃い寛永十七年九月十八日白石の河原に矢來を結ひ正面よ役人の仮屋を設らい伊達家よりの檢使荻野刑部競但馬の両人ゐ當城主片倉小十郎家來を引連出張なす其他警固の士分い三百余人居並びたり扨も此沙汰隠れ無々れい近國近郷より見物の群集い最も夥多しく有繋よ廣き河原ゐれど錐を立る隙も無く押合ふてゐて見ゐにける扨其刻限ゐゐりけれい酉の方より矢來の中へ入來る人を兎見るに肌に鎖りの着込を着し黒羽二重の衣服を着し袴の股立高く挾三尺二寸の刀を横たへ大手を振て入來る逞ゐん志賀團七にて今年三十二歳の壯年荒くれ武士と見へよける東の方より入來る両人の女子を見てあれべ白装束に紅藍の襷を十字に結どりて甲斐〻しくも脚半股引同じ製造の脇差を佩び妹と見もるい鎖鎌姉ゐふん長刀を小脇に抱込出來る其容顔の艶麗いしき孰れを孰れと別難ねし花の唇吻柳の眉最弱やのよ見ゐよける數萬の見物ゐれを見てゐゐ美くしの處女よ斯る處女の如何よして彼の荒くれし武士よ勝可きようい有ぬものゐら無慙やと口々ゐ歎息の聲は止ざりけり引續きて金井半兵衛坪内以下の三名ゲ入來るを見て諸人いヤ、と喝采て語けるい此人達が付添ふかふは氣配ふ事も有まじと又歡喜の聲動搖めきけり扨夫より双方へ白木の膳部へ鹽菜にて湯漬を給ひ引續き徒目付両人立出で双方の装束を改たひるに團七い鎖帷子を着用して居たりしのべ武士にして雖討の方法を知らぬ事も有るまじ最臆病の致方なりとて其場に於て剝取けれべ數萬の見物一統にどつと笑へべ團七も面目あげに見ゐにゐる夫より茶碗三顆よ水を盛裏中へ置ゲれべ三人い是を飲終り茶碗を大地よ打擲て微塵に碎きて双方よ別れ指揮の太鼓を待に

々る程無たう〳〵打鳴す太鼓の音に立上る妹女信夫い團七に近づき寄りて如何に團七殿一昨年五月廿八日御身の爲ゑ相果し與太郎の娘女信夫あり事の起りい我よりおれば先我儕より御相手せん尋常ゑ勝負あれと聞き團七冷笑ひ最不慣ゑい思ふおれど望とと有れば詮方おし刀の錆となして呉んと三尺二寸の大刀を大上段に振被りサア來れと身搆へたり信夫は分銅を打振〳〵團七が刀を纏め落さんと蒐れは彼方も知れ者おれば彼方へ外し此方へ避け隙を覗ふて居たりしゞ彼の分銅と鎖り鎌が交る〳〵に眼前を離れず其疾き事稲妻の如く打出す透の有されば侮とり難く思ひつゝ此所を先途と戰ふたり斯く爲る事半時余り双方共に薄手を負ひし容子を見て取り相闘の鐘を打鳴らせば足輕六個棒を以て双方へ引分け氣付藥を給ひ息を入れ暫時ありて二番太鼓ゑ立上る姉宮城野い白柄の小長刀を氷車の如く振廻し切て蒐るを受流し双方互ひに秘術を盡し追つ卷つ火花を散らす闘ひしゞいつ果べしとも思されゞ此時金井半兵衛い若し此儘に捨置ば合討になるも知る可のらゞと思えゞ竊りに懐中より豫て准備の釘取出し丁と打い狙ひ違はす志賀團七ゞ右の眼に發止と立てば驚き叫ふ程もあらせゞ再度飛來る八寸釘に左の眼を射ふれにければ最う叶ゑじと盲目蒐に切て廻るを宮野城い疾くも鎖りを放懸て團七ゞ両の手ゑ搦ゑ付て信夫を呼い走來りて長刀振つて両腕打と斬落せば尻居にどうと倒るゝゑゞ宮城野い取押へ甫無父の尊靈讎敵團七を今日只今打取たり無念を晴して佛果を得給ゑと鎌取直し團七が首をふつと掻落せゞ數萬の見物一統に仕さりや〳〵心地よし日本無雙の手柄おりと稱嘆の聲い空ゑ響き大地に轟き夥多しく暫時い鳴も止ざりゝる抑姉妹い幼少おき女子の身ゑて父の讎ゑ復さん事い最難き業ゑいわれゞ孝心を神明佛陀の感じ給ひ加護なし給ふゑ寄るおるべしと今の世迄も言傳へて孝女の鏡と成ゑける

寶錄文庫　白石噺孝女之仇討下之巻　終

（定價金十五錢）

明治十七年一月九日御屆
同　十七年三月出　　版

岐阜縣平民　和田篤太郎
芝區新櫻田町十番地
編輯兼出版人　春陽堂
東京　地本同盟組合章